



TITLE:

書評 Nick Smith, I Was Wrong: The Meanings of Apologies (Cambridge University Press, 2008, 298p)

AUTHOR(S):

WITTIG, Joshua

---

CITATION:

WITTIG, Joshua. 書評 Nick Smith, I Was Wrong: The Meanings of Apologies (Cambridge University Press, 2008, 298p). 哲学論叢 2009, 36: 180-182

ISSUE DATE:

2009

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/126636>

RIGHT:

---

書評

---

Nick Smith, *I Was Wrong: The Meanings of Apologies* (Cambridge University Press, 2008, 298p)

Joshua Wittig

---

ニック・スミスが昨年出版した *I Was Wrong: The Meanings of Apologies* は謝罪を哲学的に取り扱う初めての長編論文である。これまで、他の哲学者によって書かれた謝罪に関するエッセイや短編論文のほとんどは謝罪の定義、つまり「謝罪とは何であるか」や「謝罪の条件とは何か」などという問題に注意を向けていた。それに対して、スミスのアプローチは謝罪の機能を問うために、その本質よりも謝罪の実践的な役割と謝罪が伝わるさまざまな意味を追究する。本書の大きな目的の一つは、望まれている意味を満たす謝罪と望まれている意味をほとんどかまわなく満たさない謝罪との根本的な差異をはっきりさせることである。この分析には正確さがいくらか欠けている、とスミス自身は認める。が、謝罪ほど複雑で日常的な現象を取り扱うには、正確さばかりではなく、社会、文化、個人々々の無数の違いやニュアンスを含む射程の広い方針が相応しい、とスミスは論じる。

本書の前半にスミスは個人と個人の間に起こる謝罪に注目する。後半には集団の謝罪(collective apologies)を取り上げる。本書の全体にわたって多数の謝罪の例があらゆ

る分野から引用される(政治、ポップカルチャー、古代文学、等)。これらの例を分析するための基準としてスミスはまず「至上謝罪」(categorical apology)を説明する。これはこの本において非常に重要な概念であるからここに焦点を当てることにしよう。

謝罪の研究を方向付けるために、著者は謝罪の最も厳格な形態を「至上謝罪」と定義づける。この定義はあくまでも暫定的なものであって、謝罪の形而上学的な形を描くものではなく、むしろ至上謝罪の規定は謝罪の一つのモデルや基準であって、謝罪が持つ意味の有無をより精密にはかるためにあるものだ。

しかしスミスがここでいう「意味」とはいったいどういうことなのだろうか？ スミスが使っている「意味」は特殊のものであって、私たちはある知らない言葉の意味を問うときやある数字はなにを意味するのかと聞くときの「意味」ではない。スミスが意味を問うときに次のような質問をする：「ある特定の脈絡(context)において、謝ること、あるいは謝ってもらうことは各自の者にとってどのような意味があるのか？」。スミスの前提の一つは謝罪にはすべての脈絡にまたがるある一つの固定した意味はないということである。それらの事情を無視することや普遍化しようとすることは各謝罪の根本的な不釣り合いや特異性を十分に尊重しないことにほかならない。したがって、至上謝罪を定義づけるにあたって、スミスはある固定した意味がすべての謝罪

に適応することは不可能だと主張しながら、やはり各謝罪の謝罪としての成否や有意義性を指摘することはできるのであろう。

スミスが述べる至上謝罪の要素は多数あるが、その中から二つの要素を取り上げることになろう。一つ目は「責任の受諾」(acceptance of blame)である。なるほど、謝っている本人が自分の責任を認めなければ本来的な謝罪になるとはいいいがたい。しかし、責任の種類はさまざまあるとスミスは指摘する。本人が原因ではない時の倫理的な責任 (moral responsibility without blame)はその一つである。例えば、人が川に溺れているときに、私がその人を川の中に押したわけでもないのに、助ける責任(義務)があろう。その他には本人が原因であるときの倫理的な責任 (causal moral responsibility) もあって、本人が原因であってそしてその行為がとがむべきものである場合の倫理的な責任 (blameworthiness) もある。本人が原因であるときの倫理的な責任 (causal moral responsibility) の必須条件はその本人がその事態の原因であることだが、それだけではかれの罪の有無ははっきりしない。生徒を罰する教師はその罰の近因ではありながら、自分の決断が正当だと思っているなら自分が罪を犯したと認めないはずである。その反面、本人が原因であってそしてその行為がとがむべきものである場合の倫理的な責任 (blameworthiness) は近因の関係とその行為の不当さや罪深さと、両方を認めなければならない。すなわち、「私はXをした。

そしてXは悪いことだと思っている」と本人は認めなければならない。

上での述べた責任の区別を背景にして、人が「私は責任をとる」とか「Xは私の責任である」とかを主張するときに、ここにある「責任」の類型は基本的にあいまいである。その話者はもしかするとXの近因の責任を認める一方、Xは悪いことだと思わないかもしれない。英語の I'm sorry という言葉はこのあいまいさを深めるばかりである。Sorry は同情、悲しみ、哀れみ、という個人的な罪悪感以外のあらゆる感情を指すことができる。なのに、多くの人々は I'm sorry を謝罪そのものとして単純に受け取ることがよくある。この一般の謝罪の言葉のあいまいさを利用して責任や罪の受諾を避けながら、形だけの謝罪をすることは十分可能である。日本語の「申し訳ございません」や「ごめんなさい」に似たような分析を拵えたら、その成果もきっと興味深いものであろう。万引きで捕まった少女が「ごめんなさい」というときにその言葉の対象(つまり、何に対して誤っているのか)は果たして何であろう？ その万引きの行為自体のために謝っているのか？ それとも自分の万引きがばれたことに関して悔やんでいるだけなのか？ ちなみに、I'm sorry の不明瞭さを克服する言葉として、スミスは I was wrong for X (「私が犯したXは悪かった」)というより正確な表現を勧めるのである。もちろん、この代わりの言葉を使ったとしても謝っている人の内面状態は相変

わらず不可解のままであるが、少なくとも言語上では自分の近因の関係と罪とを認めていることは確かである。

至上謝罪のもう一つの要素は「適格」(standing)である。適格の問題はまさに謝罪の「だれ」である、すなわち、だれに謝罪する義務や権利があるか、という問題である。多くの謝罪はこの適格条件を軽率に扱い、ある謝っている人は本当に謝る資格があるのか、という肝心な疑問を持ち出さない。子供のために謝る両親、国史にあった罪を謝る政府、会社のために謝る代弁者、などという例は多く見られる。日本では謝罪における適格問題は格別に著しい。本人に責任がなくても謝ることは常識的なものかもしれない、と筆者は思う。人身事故のあるときの電車内のアナウンスは特に興味深い一例である。しかし、スミスがいうには、謝罪は財産などと違って譲渡不可のものである。したがって、厳密にいうと(そして至上謝罪の重要な条件として)過失のある者しか自分の犯した罪や過ちを謝ることができない。

スミスの分析は謝罪という入り組んだ現象のさまざまなニュアンスを上手く取り扱うことに成功している。英語であれ日本語であれ、謝罪という現象を考察する基本語彙は少ない。だから、謝罪を哲学的に議論できるための基本語彙を明確にしたことが本書の最大の価値であろう。本書は謝罪の哲学の入門書というより、謝罪の哲学を成立させる書物というべきであろう。当然

ながら、スミスの英語を中心にする言語学的な主張の多くはそのまま日本語には適用できないかもしれないが、かれの試みに倣って今後日本の独特の謝罪の文化や多様な謝罪の表現の研究において似たような興味深い成果があることをのぞむばかりである。